

## 記念誌「相中相高百年史」 ” 思い出の記 ” より

## アメリカ映画の魅力

中48回卒 渡辺 旻 <sup>(※1)</sup>

日本軍国主義とともに生まれ育った昭和一桁の私共は、人に聞かれれば将来の夢は必ず陸・海軍の大将になるというもので、芸能などという者は軟弱野郎とされた。幼い心に神国日本の絶対の勝利を信じきった、それなりに充実した日々を送っていた。

相中入学時から全生徒が勤労動員の対象とされ、上級生は郡山などの軍需工場へかり出され、下級生の我々は原町の航空隊で、戦闘機を敵の攻撃から守るため山の中に隠す穴を掘るための勤労動員で、原町小学校の講堂に泊まり込んで日々モッコ担ぎの重労働が続いた。或る夜半皆が寝静まったその講堂の窓を覗く若い女が現れて少年達を驚かせた。何でもニシドン辺りの気の狂った女性だということが後で判ったが、一時はユーレー説も流れて不安をかりたてた。トロッコを使った土方仕事は少年達にとってきついもので、或る日林君がトロッコにはさまれて指を切断する事故が起きたが、そのとき離れた指を直ぐにくっつけると人体は元に戻ることができることを、初めて知って驚いた。

二年生の夏、原町も敵の空襲を受けて石神に避難していたとき、玉音放送にとめどない涙が流れた。戦争中厳格一点張りの中学生は、戦争集結とアメリカ軍の進駐でどっと流れ込んだ自由・解放の空気に晒され、宇多川辺りの中村座ではアメリカ映画の上映が続いた。何と新鮮で開放的なアメリカ！片田舎の少年には強烈な印象が植えつけられ、アメリカ映画に憧れの社会を見出しにいったのである。

丁度その頃中村座で上映された「少年の町（ボーイズ・タウン）」は、殊の外我々戦争から抜け出した少年達に深い感動を与えた。同級生の植村君が主人公のミッキー・ルーニーに宛て、中学生英語で手紙を書きハリウッドへ出したところ、或る日アメリカのミッキー自身から直筆の返事が届き、クラス中がビックリ仰天興奮の坩堝と化したのだった。このハッピーニングは、内々アメリカに対する関心を強めていた私に更に刺激を与え、「俺は絶対アメリカへ行って自分自身の眼で真実の姿を見るぞ！」とその思いをかきたてた。

サンフランシスコ講和条約が締結され、日本が独立を回復した昭和二十七年に私は大学三年になっていた。この年初めて日本に米国の「全額奨学金米国大学院留学（所謂フルブライト法）」の制度が適用され、大学卒業後及び卒業予定者に門戸が開かれた。米国行きのチャンスを虎視眈々と狙っていた私は、「コレダッ！」と胸をときめかせたが、まだ三年生だから卒業見込みという訳にもいかず、じっと我慢の一年を待った。

翌昭和二十八年四年生に在学のままフルブライト第二回試験に挑戦、第一次から数次に及ぶ選考の結果、二十九年六月に入りフルブライト委員会から合格の連絡が届いて、かねてから希望の五大法科大学院（ロー・スクール）の一つミシガン大学大学院への留学が決まった。

戦後間もないその頃のアメリカは、日本とは全くの別世界。豊かな資源に恵まれた広大な国土にあの世界大戦でビクともしなかった強大なる経済。その実力には度肝を突き抜くような驚きを感じた。

(※1) 昭和24(1949)年卒 原町出身

(※2) 会員名簿から類推すると、植村清重氏。昭和24(1949)年卒 飯豊出身